

# さ い き た だ す 佐伯 矩 (1876~1959)



日本における栄養学の創始者。新居郡氷見村(現、西条市)出身。3歳の時に、伊予郡本郡村(現、伊予市)に移り、愛媛県尋常中学校(現、県立松山東高等学校)を経て第三高等中学校医学部(現、岡山大学)を卒業、京都帝国大学医科大学(現、京都大学)で荒木寅三郎博士に師事した。

明治35(1902)年、内務省伝染病研究所(現、東京大学医科学研究所)に入り、北里柴三郎博士の下で細菌学及び酵素について学び、大根から消化酵素「ラファヌスジアスターゼ」を発見した。明治38(1905)年、渡米してエール大学で生理化学を学び、帰国後の大正3(1914)年、私立栄養研究所を設立、栄養改善を全国各地に説いて回り、「偏食」「栄養食」などの言葉を作った。その後、国立栄養研究所が開設すると初代所長に就任、栄養の総合的研究で世界的権威となった。大正13(1924)年、私立の栄

養学校(現、佐伯栄養専門学校)を設立して栄養士を養成、卒業生の橋爪幸重を愛媛県技手として故郷に派遣、栄養改善事業に取り組みさせた。一貫して栄養学の確立と実践による食生活の改善を説き、『栄養効率の研究』などの論文を著した。

## 略 歴

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 明治9(1876)年9月1日    | 新居郡氷見村の医師の家に生まれる。  |
| 明治11(1878)年       | 伊予郡本郡村に移り、少年時代は北山崎村・郡中町で育つ。  |
| 明治34(1901)年       | 京都帝国大学医科大学卒業   |
| 明治35(1902)年       | 上京し、内務省伝染病研究所の北里柴三郎のもとで細菌学と毒素化学を学ぶ。                                    |
| 明治37(1904)年       | 「ラファヌスジアスターゼ」という大根中の消化酵素を発見し学会で発表する。                                   |
| 明治38(1905)年       | エール大学大学院に留学する。   |
| 大正3(1914)年        | 東京市芝区白金三光町(現、東京都港区高輪)に世界初の栄養学研究機関、私立栄養研究所を設立する。米の研究を行い、文部省から研究補助費を受ける。 |
| 大正7(1918)年        | 文部省に「營養」の表記を「栄養」に統一するよう建言し、これより後に完全に定着                                 |
| 大正9(1920)年        | 国立栄養研究所が開設され、初代所長となる。  |
| 大正10(1921)年       | 「栄養学会」を設立する。   |
| 大正11(1922)年       | 精米の度合いは胚芽を含む七分搗米が良いとして奨励する。  |
| 10月19日            | 当時摂政であった昭和天皇が国立栄養研究所を視察し、それ以降、昭和天皇は七分搗米を用いるようになった。                     |
| 大正13(1924)年       | 私立栄養研究所跡に、世界初の栄養士養成施設である私立の栄養学校を設立し、卒業生を栄養士と称した。                       |
| 昭和2(1927)年        | 国際連盟の要請によって国際連盟交換教授として欧米で講演する。   |
| 昭和16(1941)年       | 勲三等旭日中綬章受章   |
| 昭和34(1959)年11月29日 | 急性肺炎のため83歳で永眠  |

(写真提供：佐伯栄養専門学校)

### 〈関連図書〉

- ・萩原弘道『日本栄養学史』 国民栄養協会 1950年
- ・佐伯芳子『栄養学者佐伯矩伝』 玄同社 1986年
- ・愛媛県史編纂委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・日下部正盛『栄養学の創始者佐伯矩博士小伝』 タケウチ印刷所 1997年

〈主な収蔵資料〉…(P195, 9~10)

〈ゆかりのある場所〉…(P269~270, 24~25)